

## 全体者にして唯一者である存在

### 断片(一)

ついきさほどわたしが道端で拾い手に取った小さな石一個、あの石一個をわたしは、わたしが学んだ科学的知識でもって説明しつくすことはできない。それは、とくにわたしという人間が地質や物理や心理や物性論の方面に暗く、つまりわたしが不勉強で、あの石の存在を説明するためのさまざまな手法や知識を現在のところまだ習得してはいないということによるのではない。わたしであれ、他の誰であれ、あるいは多岐に別れる現代の科学のおおの分野の知識に詳しい幾人もの人々が(すべての分野の知識に詳しい人間は、現代では不在であるし、今後もしも不在でありつづけるしかないとしたら)たがいに誠意をつくし協力し合ったとしても、そしてこの場合は、知識だけではなく一種の倫理ないし道徳もまた要請されることになるが、それでもあの小さな石一個の存在を説明しつくすことはできない。人間の知力の活動の成果である現代科学が獲得してきたすべての技術と知識の総力を挙げて立ち向かってもおの石ころ一個を完全に説明することは不可能なのである。いや、それどころかさらに、科学が今後獲得することのできるすべての技術と知識

### 北岡 崇

をも加えた総力をもってしても、あの存在を知へと還元することは決してできないのである。それは何もあの石が、認識の対象として他の対象には見られない固有の複雑さを秘めているからというわけではない。あの石は、例えばわたしを包むこの地の大気に比べて特別に複雑なものではないし、ましてや、あの石を拾った山道の両側に生い繁るさまざまな植物や、ときおり目にするうさぎ、りす、たぬき、いたち、等々の小動物のどれよりも決して複雑なものではない。にもかかわらず、説明しつくすことはできないのである。それはあの石が、大気や山ぶどうやうさぎと同様に、科学的知性をもっているとは、石、大気、山ぶどう、うさぎ、何であれ、すべての存在に具わる同一の深み、共通の深みである。この深みは、知性があるのかを経験的に所与なる対象として、その対象を外側から、すなわちその客体を主体の側から認識しようとするときその対象の奥行きとして現われるものであるが、知性がこのように科学的にふるまうことによって何ものかと関わりとうるとき知性は決してその奥行きを究めつくすことはできないし、ましてやこの深みそのものの中に降りてゆくこともできないのである。だからこそ、科学が将来獲得す

るかもしれないすべての技術、知識を考慮に入れてもあの存在を知りつくすことはできないと、す、で、に、今、言えるのである。ところで、対象認識にたずさわる当のその知性は、たいてい、右に述べたような、すべての存在に具わる同一の深みを意識することはなく、たとえ意識してもそのような深みをそのような深みとして意識することは稀れで、さしあたっては、経験的に所与なる認識対象の完璧な解明の不可能性として（つまり奥行きとして）意識することが多い。そして、完璧な解明が不可能であるというこのこと、すなわち解明がいつまでも未完成であるということ、まさにこの事情があるからこそ、人々は経験科学の無限の進歩という理念に思い至ることができたのである。いつまでも未完成であるというネガティブな事情をポジティブに言い換えるなら無限の進歩とでも言う他なかったのである。実際に、経験的に所与なるもののリアリティが実体を構成し、現実を構成すると見る素朴な立場からすれば、無限の進歩とでも言うしかなかったらうと思われる。しかし、わずかなりとも反省を進め、右のようなリアリティを実体とか現実とかとは別のもの、幻想、妄想、夢想、などといったもののリアリティと見るに至った人なら、経験科学的な対象認識の営為を、終わりのない遊戯、寄る辺のない漂流とでも呼ぶのではないだろうか……。無限の進歩という理念にかぎらず、すべての理念がたんなる理念でしかないことを知り抜いている現代、気分は確実に後者の方に傾いている。しかし進歩にせよ漂流にせよいずれにせよ、真に思考する者からすれば、経験科学的な対象認識の営為は、そのために生きかつ死ぬことのできるような目的ではない。

断片（2）

全体、……そのつどの全体、……刻々その身を自証し刻々それ自身を実現する全体、すなわち現実、……全体者にして唯一者であるこの現実、……自己洞察するこの現実、……この現実から脱落しこの現実を見失った人間は、全体者にして唯一者であるこの現実を「回復」するために、またその全体者に「至り着く」ために、独力で何をなしうるか？ 人間の営為を注意深く眺めると、人間が一つには知識を介して、また一つには倫理ないし道徳を介して、他者との間の亀裂を埋め、こうして全体者を「回復」しようと努めている様子が見えてくる。つまり、人は、知識、とりわけ経験科学において他者を己れのうちなる観念ないしことばないし記号へと変換することにより、他者を了解可能性と操作可能性の水準へと移し、こうして他者を己れの支配下におさめようとする。知は力であり、知る所は支配領域である。しかし、道端にころがる小石一個さえ、人は、己れの支配下におさめることはできない。経験的に所与なる事物としてわたしが認識しようとするその対象は、決して完全にはわたしのうちなる観念やことばや記号へと変換されることはないからである。要するに、経験科学は、他者とわたしとの間の亀裂を埋めることができないのである。それどころか、経験的な所与性を前提してはじめて発動するという性格を具えているかぎり、経験科学は、自分自身を否定することなしに、全体者にして唯一者である現実のもとに「至り着く」ことはできないのである。このことは、認識が実践の局面に適用される際に生じるテクノロジーについても言える。テクノロジーは、わたし、あるいはわれわれ、あるいは人間と、他者との間に走る亀裂を消し去ることはできず、むしろその亀裂を前提してはじめて可能になるものである。では、倫理ないし道徳は、他者との亀裂を埋めることができるだろうか。人は、倫理ないし道徳を介

して全体者を〈回復〉しようと努める。倫理ないし道徳を介するとき、人は、善を体現する他者へと己れを従属させることで、全体者を〈回復〉しようとする。倫理ないし道徳には、個人的な信念に注目するものから広く人倫性（社会性、倫理性）に注目するものの間に無限の相があるが、これは、経験科学に、個別的対象（例えば、海洋とか、銀河宇宙とか、特定の事態とか、特定の人物とか、現実からの抽象態と一括できる個々のもの）への了解、知解、支配をめざすものから対象一般に妥当する法則性の知をめざすものまでの間に無限に多様な相があるのと同じである。しかし、倫理ないし道徳も、経験科学の認識と同様、決して全体者を〈回復〉することはできない。概括して言えば、対象認識は、他者を己れの支配下に置こうと努めつつも、結局は失敗することを定められているし、倫理ないし道徳は、他者に己れを従属させようと努めつつも、結局は失敗するように定められている。対象認識も、倫理ないし道徳も、わたしと他者の間の亀裂を前提しつつ、その裂け目を埋めようと試みであるが、この試み自体が、その裂け目を前提してはじめて可能になるものであるのだから、対象認識は対象認識を否定することなしに、また倫理ないし道徳はそれ自身を否定することなしに、あるがままの姿における現実、全体者にして唯一者である現実を〈回復〉することはできない。

### 断片（3）

特定の対象に対する執着をすべて捨てて、世界ないし宇宙の果てなき果てにまでまなざしが至るにまかせ、全体者にして唯一者である現実をそのあるがままの姿において洞察するということもありうるのではないだろうか……。その現実すなわち現実への洞察とはあ

えて言うなら過去も未来もない（それゆえ伝統も履歴もなく希望も不安もない）永遠の現在を静かに享受する噴泉のごときものである。噴出と落下、崩落と誕生、上昇と下降、呼吸と吸気、能動と受動、死と生、これらの対立概念を包括する噴泉、無数の世界を産出しては同時にそれらをことごとく己れのうちに回収する巨大な噴泉、この宇宙的に巨大な噴泉のヴィジョン。

### 断片（4）

わたしが他者を完璧に知る境地、それはつまり、わたしは他者であるという事態が成立し、この事態の中でこの事態が気づかれている境地であるが、わたしがその境地に立てば、そこでは、わたしと他者の差異が消滅する。わたしがわたしを知ることが同時にわたしが他者を知ることであり、また他者がそれ自身を知ることであり、他者がわたしを知ることである。ここに言う知るとは、わたしがわたしを知る知であり、他者がそれ自身を知る知であるから自己知であり、しかもその自己知の自己はわたしであり他者である自己であるからわたしと他者との亀裂を克服した全体者である。そして、一切の他者との亀裂を克服した全体者は、もはや、それに相対するものを何ももたないという意味で唯一者である。このような全体者にして唯一者である存在、己れの存在を己れ自身において証する存在、これだけをわたしは、厳密な意味で、光、真理、真実、現実と呼ぶ。この光の照りわたる場、真理の住むところ、現実という境域において、わたしと他者との間に隙間はない。そこでは、わたしは他者にさしつらぬかれ、その他者にわたしが透徹する。そしてそのような活動の中で、他者にわたしが灯り、わたしに他者が灯る。このとき、他者にしてわたしである全体者が、他者であるわたしを通して、ま

たわたしである他者を通して、己れを語り出す。

断片 (5)

ちょうど、無限数の点が相互に接触し合うと同時に一つの点へと消融してゆくように、そして同じ一つの点のうちに、無限数の点が重なり存在するように、全体者にして唯一者である現実、真実、真理、光は、己れのうちに万物をたたみ込み所有する。おのおのすべてのものが、おのおのすべてのもののうちにある。

断片 (6)

あなたをただただ知りたい一念でわたし自身のことを忘れはてあなたのもとにおもむいたとき、驚くべきことですが、わたしはわたしのもとにあったのです。わたしを置き去りにしたわたしがわたしを発見したのです。いえいえ、わたしを置き去りにしようなどと努力したわけではありません。自分のことを忘れようとか置き去りにしようとか努力すれば、かえっていつそう忘れられず置き去りにできないのがわたしという存在、なぜならそのとき、忘れはて置き去りにしようとするわたしのもとにそのわたしが忘れたい置き去りにしたいと願っているわたしという存在が必ず現われるからです。ですから、そうではなくて、わたしがもうわたしのことなど思いもかけぬほどわたしのことを忘却しているとき、それほどわたしがあなたを知りたい一念であなたのもとにあるとき、そしてあなたはわたしの目を通してではなく、いつのまにかあなたの目を通して見ることを学んでしまったときに、わたしはわたしを発見し、そのわたしのもとでこの上なくわたしらしく存在するのです。これは奇蹟です。いったいどうしてわたしは、わたしのことなど忘れはてていたとこ

ろで、わたしを得ることになったのでしょうか。どうしてそのようなことが可能なのでしょう。忘れ去ったわたしの方を振り返ることともなかったし、あなたのもとを離れることもなかったのに、どうして……。わたしがわたしのすべてをかけてあなたのもとに至ったときにあなたのもとに見出されたわたしとは、あなたからの贈り物ではないのでしょうか。あなたのもとに見出されたわたしは、あなたでありわたしであるわたしなのです。そのときわたしはあなたなのです。自分の努力では決して至り着くことのできない光の中に、わたしが立っているのです。それは、あなたが、わたしがわたしを忘れあなたのもとに至り、あなたのもとにとどまるということ。を許して下さったからです。あなたがわたしを受容すること。わたしが立つこの光の中で、あなたでありわたしであるこの光の中へ消融したわたしが、光であるわたしに気づき、あなたであるわたしに気づくのです。そしてまた、わたしがあなたのうちにわたしを見出すこの光の中で、あなたはあなた自身を見るだけでなく、ひよっとするとさらにわたしの中にあなた自身を見て下さっているのではないのでしょうか……。

断片 (7)

愛のないところに光、真理、真実、現実には存在しない。愛の冷えたこの世界においてわれわれがよく耳にするゲンジツとは、そのほとんどすべてが幻想である。

断片 (8)

問題…他人の苦痛は光の存在の不可能性を証明するか？  
わたしがあなたであり、あなたがわたしであるという事態の存在

の不可能性、つまり光の存在の不可能性を証明するために、論拠として、他人の苦痛を提示する人がいるかもしれない。彼は言うだろう。おまえがあなたと呼ぶその人が手に傷を負ってその苦痛に耐えかねているときに、その苦痛はその人だけのもので、おまえのものでもないし、もちろんおれのものでもない、おまえはおまえがあなたと呼ぶその人の苦痛をそのままにおまえの苦痛として味わうことはできないのだから、おまえがその人と一つであり、その人がおまえと一つであるということなど決してありえないのだ、と。また、

こんなことを言う人もいるかもしれない。その苦痛はその人の手の傷口から脳に至る神経系統にのみ、あるいはせいぜいまたその神経系統を所有する身体ないしその人自身にのみ関わることで、その外に出ておまえやおれの頭脳や痛覚に同じ刺激を与えるものではない、もしもおまえがおまえ以外のおのすべての存在であるなら、おまえの四方八方にいる病人や怪我人やの苦痛が一挙におまえの中に殺到しておまえの（またおまえがおまえと一つだと言う他の人々の）神経は破裂してただちにおまえは昏倒することだろう、が、実際にはおまえは、暢気に、わたしはあなたであり、あなたはわたしである、云々、と言っているだけではないか、と。

他人の苦痛への理解は本来、共感的な知であり、苦痛を生理学的に説明する場合も、その苦痛が他人の苦痛である場合は、共感的な知なくしては、苦痛への理解とはならない。それゆえ、他人の苦痛を話題にする人は、他人の苦痛への共感的な知をすでにもっているか、そうでなければ自分が話題にしている当のものをまったく理解していないかである。つまり、傷口の大きさや神経系統の様態を詳しく知っていても、それだけでは、他人の苦痛を理解することにはならないのである。もしもこれらのことが認められるなら、他人の

苦痛を話題にする人は、自分の言っていることを理解しているかぎり、その苦痛を、その苦痛に悩む当人の中に閉じ込めることはできないということも認めなければならない。だからといってしかし、その共感的な知は、他人の苦痛をそのままに自分の苦痛として味わうということではない。なるほどたしかにわれわれは、訪ねたこともない遠い土地に住む人々や、ことばを交えたこともない人々の苦痛を（それどころかまだ生まれてもない人々やすでに死んでいる人々の苦痛をさえ）共感的に知ることがあるが、それでもこの知をもつて、共感される側の苦痛と同一である苦痛の感受であるとは言えない。共感的な知は、共感される側と共感する側、あなたとわたしの間に距離のあることを前提しており、それが共感的な知であることをやめないかぎり、その距離を埋めることはできない。しかしこのことは、すなわち、共感的な知としての苦痛は、あなたでありわたしである全体者の自己知にはなりえないということを証明するだけであり、光が光を知るその光の中に苦痛は不在であるということとを証明するだけである。つまり、わたしがあなたと呼ぶその人の苦痛はその人とわたしとの間に距離の存在することを証明してはいるが、わたしがあなたであり、あなたがわたしであるという事態の不可能性、光の存在の不可能性を証明するものではないのである。

『ヨハネ黙示録』には、神と人がともに住むときのことを、「今よりのち死もなく、悲歎も、號も、苦痛もなかるべし」（二一の四）と記されているが、日々さまざまなリアルな苦痛に悩み引きずり回される人々には妄想としてしか考えられないかもしれないこの語句は、それを、光の中に、苦痛は存在しないと読むことができるのであれば、真理の泉に由来する語句ではないかとわたしは考えている。苦痛は、全体者にして唯一者である現実から脱落しこの現実を見失った存在

つまり抽象的な存在にいつのみ存在するのである。

まとめると、他人の苦痛、共感的な知の不完全性は、光の存在の可能性を証明するものではないし、ましてや抽象的な存在にしか関与しない生理学やその他、諸々の経験科学が光の存在の可能性を証明できるはずがない、ということになる。

### 断片 (9)

ほんとうの宗教やほんとうの芸術やほんとうの思考などは、特定の地域や時代にはおさまりきらない。特定の地域や時代は、本物の善、美、真に耐え抜くことができない。特定の地域や時代は、それ自身のうちにおさまりきらない善や美や真を、他者として排除する。そして自覚的にか無自覚的にか必ずそれらを迫害する。迫害を正当化するための名目は、歴史的要請、社会正義、地域の発展などである。本物の宗教、芸術、思考にとって、それゆえまた本物の善、美、真のうちに生死を超えて存在する者にとって、迫害されることは、避けることのできない運命である。「なんぢら我が名のために凡ての人に憎まれん」(『マタイ伝福音書』一〇の二二)のことばは、人間の手になる無数の文化形態をつらぬいて妥当する。その普遍妥当性は、人間の手になる文化形態の一つである科学的な知識の全体をつらぬいて妥当する形式論理学の法則の妥当性に、普遍性の点で少しも劣らない。排除と迫害が不可避であるのは、本物の宗教、芸術、思考が、全体者にして唯一者である現実を、その起源としているからである。つまり、光が、それらに共通のオリジンだからである。その光の中に立つ宗教、芸術、思考は、特定の地域と時代を一切超えるものであるから、民族、国家、言語、さらにまた教会、学校、絵画、音楽、哲学書や宗教書など、どの特定のものの中にも閉じ込

められてはいない。

### 断片 (10)

わたしは、何を読むにせよ、何を見るにせよ、何を聞くにせよ、何に触れるにせよ、結局はわたし自身を知ることができるだけであり、仮りにわたしが、プラトンの著作を読んだり、バイブルを読んだり、スピノザの『エチカ』を読んだりしても、わたしは、わたし自身を読むことができる以上に深く、またわたし自身を読むのとは別様に、それらを読むことはできない。ニーチェが語っていることであるが、「われわれは、結局、自分自身を体験するだけなのだ」<sup>(1)</sup>。それゆえ、奇妙かつ素朴な言い方ではあるが、わたしがわたしを読むことが、わたしがプラトンを読むことであるという事態がもし可能であるとすれば、それは、わたしがプラトンである場合のみのことであるし、プラトンがプラトン自身を洞察するようにわたしがプラトンを洞察するという事態がもし可能であるとすれば、それは、わたしがわたしであると同時にプラトンであって、そのプラトンでもあるわたしがそのプラトンであるわたし自身を理解する場合のみのことであろう。それゆえまた、それは、わたしとプラトンが、全体者にして唯一者である現実、光、真理の中にもども消融しているときはじめて可能になる事態なのである。このとき、わたしは、光が光を読むその光の中でプラトンを読み洞察するのであり、同じその光の中でプラトンがわたしを読み洞察するのである。時空的規定を負った無数の善行や無数の美しいものごとなどがこぞつてそのシンボルであろうとするこの光、あるいは現実、……この現実の中で例えばプラトンとわたしが出会うようなことがもしあるとすれば、「われわれなるわれ」にして、「われなるわれわれ」<sup>(2)</sup>は、同じ泉から

光の水を飲むことになる。この光の水を飲まないかぎり、わたしは、どれほど多くの体験を重ね、読書を重ね、研究を重ね、どれほど多くの認識を獲得しても、あの小石一個を説明しつくすことのできない人と同様、わたしのの中に閉じこもり、抽象的な存在にしがみついたままなのである。

## 断片 (II)

とはいえ、わたしによるわたしの読みが、光による光の読みとピッタリ一致するということは、稀れなことである。他人が書いたものを読んで、よく調べているとか表現が上手だなという感想を抱くことがあるが、さらにこれらの感想をはるかに超えてなるほど、そのとおりだなと、意味の知においても共感においても一体感を抱くという経験は、誰にもあるだろうし、しかもおのおのの人において決して稀れなことでもない。しかし、この一体感をただちに光による光の自己知と解してはならない。多くの場合、このように解する人は、この解釈によって、自分自身を、光から、現実から、真理から遠ざけてしまう。この事態には、なまじ教会に通うものだから教会に通うことだけで自分のことを信仰者であると解する場合や、カントやヘーゲルやその他の作家の著わした書物を読んで感動しその感動する心情をもってその書物を自分で書いた気分になる場合と同様に、ある種の素朴な思い込み、感じがい認められる。わたしが、わたしによるわたしの読みが、光による光の読みとピッタリと一致していると思ひ込み、しかもこの思ひ込みがわたしの感じがいである場合、わたしは、少なくともわたしの思ひの中で、わたしがわたしを読むように他者はわたしを読むべきだと他者の読み方を強いること

になるし、光が光自身を読んでいるようにわたしは他者を読んでいるのだとうぬぼれていることになる。思ひの中で他者を奴隷化することのうぬぼれを完全にのがれている人間、それほどにまで他者と自己への洞察力に満ちた人間が、かつて存在したことがあるだろうか……。世間では、他者を奴隷化することのうぬぼれのことを例えばジョンシンなどと呼んだりするが、現実には、自己愛や自尊心は、光のうちにのみ見出されるものである。しかし、光に背を向けざるをえない特定の（つまりたんに抽象的なものでしかない）歴史社会にほかならぬ世間は、人を本物の自己愛や自尊心から遠ざけ、己れが許容できる征服欲やうぬぼれをもってその代用とする。

では、他人の著わした書物をわたしが読むことがわたしがその書物を書くことであるという幸福な気分は、常に自己欺瞞なのであるうか……。わたしが他者であるという事態こそが、その表現の奇妙さにもかかわらず、むしろ現実であり、光である、くりかえしわたしは述べた。さらに、光においては、わたしがあなたであるだけでなく、おのおのすべてのもののおのおのすべてのものが存在するとも述べた。それゆえ、読むことと書くことが同一であるということが可能であるなら、他人の著わした書物をわたしが読むことがわたしがその書物を書くことであるという事態も可能であろう。つまり、書く人が光の中に立つて、この光をオリジンとすることばからなる書物を著わし、その書物をわたしが読むことでそのことばのオリジンとしての光の中にわたしが立ち、読み手が書き手と一つになるとともに、読むことと書くことが一つになるということが可能であるなら、わたしは他人の著わした書物を読みながら同時にみずからその書物を書いているということになるのである。しかし、そもそも、読むことと書くことが一つになって、光が光を書き記

し、現実が現実を読むというような事態は、はたして可能であろうか……。いずれにせよ、読むことが書くことと一つになるということは、書物のことばの意味への知解のレヴェルで生じることではなく、むしろ意味の前提であるすべての分別と差異から分別され差異化された（すなわち、すべての差異から差異化された）無意味の境地、しかもこれは意味と無意味の両方の根源としての無意味の境地であるが、この無意味の境地で生じることであり、そのような境地にわたしが生ずるのは、わたしの読む書物が不可能なことばからなり、そのことばが、そのことばの彼方ないし手前にあるそのことばのオリジンである光ないし現実へと（往相的にしてかつ還相的に）わたしを導き、その光ないし現実へとわたしの思考を開くときだけである。このとき、わたしの思考は、光による光の思考、現実による現実の思考になる。これは、原則的に言って、不可能なことではない。読者の思考を光へと導く不可能なことばは、可能である。もしもここに言う不可能なことばが不可能であるとすれば（文字どおり読めばまさしく不可能であるのだが）、読むことと書くことが一つであるという事態、光が光を書き記し、現実が現実を読むという事態はありえないということになり、ひいては、わたしはわたしが昨日書いたことばをそのことばの語るがままに、今日読んで聞きとるということさえできないということになるであろう。だが、右に述べたような不可能なことばが可能であるのなら、読み手と書き手、読むことと書くことが、同じ一つのものであるということは可能で、これら両者が一つとなったようなあの幸福な気分も、常に自己欺瞞である、はじめから決めてかかる必要はないのである。

しかしそれにしても、光に由来することば、ことばの彼方へとあるいはことばの手前へと思考を開く不可能なことばに出会うことは、

わたしの体験としては、それゆえわたしという存在にとつては稀れなことである。わたしの見るところ、ことばはほぼすべて、それゆえ言語空間・文字空間はほぼすべて、光の比喩、現実のシンボルとしてはあまりにも鈍重で、全体者にして唯一者である現実をなす光の粒子の軽快さを具えていない。もつとも軽やかなことばたちでさえも、光を放ちながら消えてゆくという火の特質に大いに不足しており、光の中で光が光を知るその洞察を静かに肯定するというよりは、何か、神々の永遠の追いかけつをたのしむにとどまっているように思えるのだ。光への途上、「その途でおまえは神々や精霊や怪物やその他さまざまな力あるものどもと出会うことだろう。彼らとかわるおまえは、玩具で遊ぶ子供のようにであれ。だが、あまり戯れすぎないように。……彼らもまた浅い存在でありなまぬい存在である」からだ。これは、以前わたしが記した自戒のことばである。

#### 断片（12）

意味をもつことばは、光から切断されている。意味深い言語空間には、光を閉じこめることはできない。これは、教会や神社に神を幽閉することができず、哲学科に哲学を閉じこめることができないのと同様である。それゆえ、わたしが、ことばの意味を手がかりに、意味のあることばを用いて、わたしの根底を掘り下げ掘り進めようとするとき、わたしはただ掘り進めていると思ひ込んでいるだけで、ことばの意味の平面を、ことばに縛られた重い思考をもって横すべりしてゆくだけなのである。人間は、ことばの意味に依拠するかぎり、自己知を光の中へと深めることは決してできない。このとき人は、自分自身の光の中に立つことはできない。自分の影を跳び超え、自分の正午を迎えることはできない。

断片 (13)

わたしがわたしに会おうのは、特異な沈黙の中でのことである。

その沈黙は、わたしがわたしをそれ自体として捉え、他者との差異のもとに捉えたりはしないときに、その捉えるわたしと捉えられるわたしとを包む沈黙である。その沈黙の底でわたしは他者であり、全体者にして唯一者である。全体者にして唯一者であるわたしは孤独である。しかし、孤独感にさいなまれることはない。そこでわたしは、神が孤独であるように孤独であり、神が幸福であるように幸福である。沈黙、充足、孤独、幸福。

断片 (14)

わたしにとって、文章を書くのは容易なことではない。これは、思考がわたしを文章のレヴェルから離脱せようとしているからではないだろうか。わたしは今、少しずつ光の中に帰ろうとしているのではないだろうか。文章を書くのが容易でないのは、わたしの文章が、一頁、二頁、三頁、……とプラスの方向に重なってゆくのではなく、極度に屈折してマイナス一頁、マイナス二頁、……とマイナスの方向に重なっていつて、一切のことばがやむ大いなる沈黙の中に、現実の中に、真理の中に、光の中に帰ろうとしているからではないだろうか。

注

- (1) Kröners Taschenausgabe Band 75, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1969 (Friedrich Nietzsche, Also sprach Zarathustra, 1883-1885), S.167.

- (2) G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden, Redaktion E. Moldenhauer u. K. M. Michel, 1969ff, Werke 3 (Phänomenologie des Geistes), Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1970, S.145.  
 (3) 「不可能なことば」については、拙稿「光、あるいは不可能なことば」、『椋山女学園大学文学部・総合文化研究センター報告書』第八号、一九九九年三月、二五頁以下、とくに二九〇頁を参照のこと。  
 (4) 拙稿「不在の現在」、『椋山女学園大学研究論集』第二十七号、人文科学篇、一九九六年三月、一七頁。  
 (5) 『テモテ前書』一の一、六の一五を参照せよ。